

## 源氏物語と長恨歌

### 其二・其三

上野 英 二

#### 其二 光源氏始末

その名の如く輝かしかるべき光源氏の一生は、しかし「事の忌み」ある『長恨歌』によって開幕を告げられた。そして、その生涯の終わりもまた、『長恨歌』によつて彩られることとなる。

『長恨歌』さながらの悲恋を演じた両親のもとに生を享けた源氏は、あたかも『長恨歌』の申し子と言っても過言ではないが、彼はその生涯の末にも、自らの身に『長恨歌』の命運を背負うことになるのである。

光源氏は晩年、生涯連れ添った最愛の女性紫上に先立たれ、悲嘆に昏れて日々を送る。紫上没後の一年の光源氏の動静を語る幻の巻は、桐壺の巻と同様、『長恨歌』を基に綴られている。

大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行方尋ねよ

「まぼろしは方士也。幻術士の名也」（『河海抄』）。幻の巻の巻名の由来となった、この歌の「幻」とは、無論『長恨歌』の「臨卽方士」、玄宗の意を体して楊貴妃の魂魄を探し求めた「道士」に他ならない。紫上を失った源氏は、幻術を駆使して貴妃の魂に巡り会った『長恨歌』の「方士」を希求したのであった。

巻名からして『長恨歌』を踏まえた幻の巻には、『長恨歌』の章句がそのまま引用される箇所も見られる。

いと暑き頃、涼しき方にて眺め給ふに、池の蓮の盛りなるを見給ふに、「いかに多かる」など思し出でらる、に、ほれぐしくして、つくぐとおはするほどに、日も暮れにけり。蛸の声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを、一人のみ見給ふは、げにぞかひなかりける。

つれぐとわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声かな

螢のいと多う飛び交ふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の古言もかゝる筋にのみ口馴れ給へり。

夜を知る螢を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

紫上を偲んで源氏が口にしたのは、『長恨歌』の一句、玄宗がかつての王宮に戻って貴妃を想う条の「夕殿螢飛思悄然」の一節であった。

このように明示されなくとも、さらに詳細に読むならば、『長恨歌』に則る記述は、幻の巻にまだまだいくつ

か発見することができる。例えば、ここに引いた部分の、「池の蓮」を眺めて最愛の女性を偲ぶという情景は、すでに『長恨歌』の歌うところでもあった。

太液芙蓉未央柳 対レ此如何不<sub>レ</sub>涙垂<sub>一</sub> 芙蓉如<sub>レ</sub>面柳如<sub>レ</sub>眉

同じくかつての王宮で貴妃を想う場面。「太液ハ太液池トテ御庭ニアル池也」「芙蓉トハ蓮ノ事也」(清原宣賢『長恨歌抄』)。陳鴻『長恨歌伝』の対応部分にも、「池蓮夏開」とあった(図1)。「長恨歌」のこの歌句は、桐壺の巻でも「太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりし容貌」と取り用いられていたが、幻の巻のこの部分の描写(図2)も『長恨歌』に拠るものと見るべきであろう。

続く七夕の条も、その延長として捉えるならば、やはり『長恨歌』を踏まえての記述と理解すべきものと思われる。

七月七日も例に変わりたること多く、御遊びなどもし給はで、つれづれに眺め暮らし給ひて、星合ひ見る人もなし。まだ夜深う、一所起き給ひて、妻戸押しあけ給へるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸より通りて見わたさるれば、出で給ひて、

たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞおき添ふ

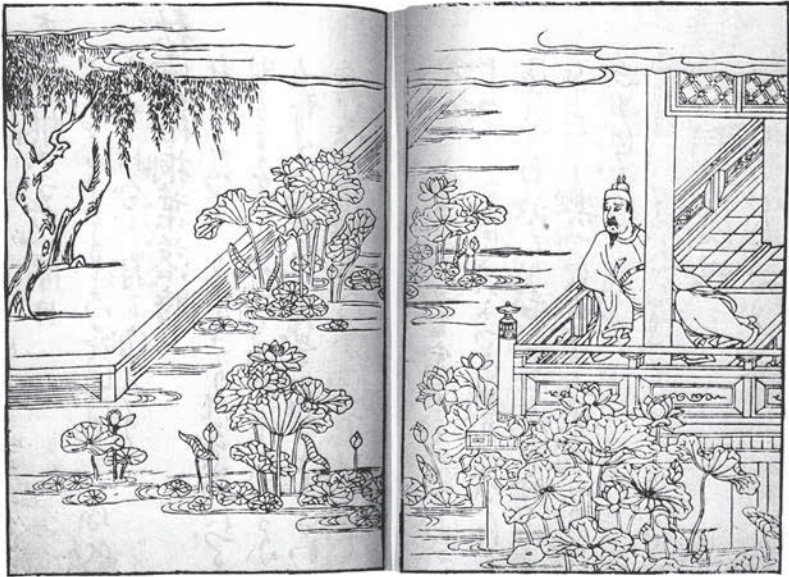


図1 長恨歌抄（内閣文庫蔵）

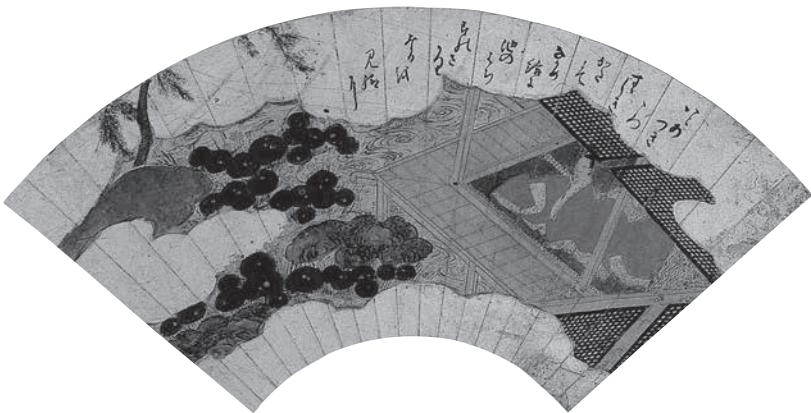


図2 源氏物語扇面散屏風（浄土寺蔵）

一見この箇所は、牽牛・織女の天上の出会いなど今や無縁のものとなってしまった、光源氏の傷心を語るに留まるものようであるが、『長恨歌』の、玄宗・貴妃の七夕の誓い、

七月七日長生殿 夜半無<sup>レ</sup>人私語時 在<sup>レ</sup>天願作<sup>二</sup>比翼鳥<sup>一</sup> 在<sup>レ</sup>地願為<sup>二</sup>連理枝<sup>一</sup>

を念頭に置かならば、七夕に因んで、玄宗・楊貴妃のように誓言を交す望みなど最早永遠に絶たれてしまった、源氏の悲嘆を描いたものと解されるであろう。

「まだ夜深う、一所起き給ひて」とは、『長恨歌』「夜半無<sup>レ</sup>人」をただちに連想させるが、『長恨歌』との対照において『源氏物語』に際立つことは、紫上の不在であろう。「たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見て」とは、天上での七夕の「逢ふ瀬」が無縁のものになってしまったばかりか、七夕の天上の交歓に想いを馳せつつ地上で愛を確かめ合った、『長恨歌』の故事までが無縁のことになってしまった嘆きを詠んだものではなかったろうか。<sup>(1)</sup>

七月七日、七夕に因んで『長恨歌』を想いつつ、亡き愛妃を偲ぶという例は、『今鏡』などにも伝えられている。長暦三(一〇三九)年八月十九日に中宮嬪子に先立たれた後朱雀天皇は「夕殿螢飛思悄然 秋燈挑尽未<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>眠」という『長恨歌』の玄宗さながら「夕の螢をもあはれと眺めさせ給ひて、秋の燈も挑げ尽くさせ給ひつ、」、一年を送るが、翌年の七夕の日は、哀惜も一人であった。

またの年<sup>長暦四年</sup>の七月七日、関白殿<sup>頼通</sup>に内<sup>後朱雀</sup>より御消息ありて、

去年の今日別れし星も合ひにけりなどたぐひなき我が身なるらむ

と詠ませ給ひて侍りけむこそ、いと忝く情多くおはしましける御時かなと承りしか。楊貴妃の契も思ひ出でられて、星合ひの空、いかに眺め明かさせ給ひけむと、あはれに、「尋ねゆく幻もがな」とや思し召しけむと推し量られてこそ伝へ聞き侍りしか。

(すべらぎの上)

勿論、「尋ねゆく幻もがな」とは『源氏物語』桐壺の巻、桐壺帝が桐壺更衣を偲んで詠んだ、

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

を引いたもの。二人は、『長恨歌』「比翼連理」の故事に倣って、「翼はを比なべ、枝を交さむ」と将来を契っていた。しかし、中宮に先立たれた後朱雀天皇には、そのように「楊貴妃の契」を交すことなど最早叶わぬことになっていたのである。

あるいは、『平家物語』。『平家物語』も、後白河法皇の愛妃建春門院即世の様を、

天に住まば比翼の鳥、地に住まば連理の枝とならんと、天の川の星を指して、御契浅からざりし建春門院、  
秋の霧に侵されて、朝の露と消えさせ給ひぬ。

(小督)

と描いていた。

作り物語にも同様の場面が描かれている。『浜松中納言物語』、父大臣の屋敷に引籠った河陽県の後を恋い慕う唐帝の様子は、七夕に因んで、次のように描写されている。

七月七日に、内裏に、西王母、東方朔など言ひける人の、今日は行き会ひける、ほうか殿といふ所にて、帝、文作り、遊びし給ふに、中納言召されて参り給へり。(中略)暮れかゝるほどの夕風涼しう吹きて、月さし出で、おもしろきに、帝、空をいたく眺め給ひつゝ、「天にあらば比翼の鳥となり、地にあらば連理の枝とならん」と、押し返しつゝ、誦じ給へる御気色、「後の御事を思ひ出で給ふなるべし」と、中納言心苦しう見奉るに、杯参りてさし賜はするを、賜りて、

交しけん契りの枝のかひぞなき遠山鳥のよそに見ゆれば

と奏したるに、「心得てけり」と思すに、え堪へずしほたれ給ひて、

契りけん昔の空にたとへても尽きせぬものは我が世とぞ思ふ

河陽県の後への、帝の寵は深く、

傍にまた人ありとも思したらず、父の宰相も大臣になし、后も十六にて御子産み給ひければ、やがて后になして並び無く時めかし給ふに、一の後の父の大臣、大きに怒りの心をなし、妬みて、この人の御思ひのくべ

きよしを、様々色々に呪ひ、いみじき事ども出で来て、今二人の後、十人の女御、かたより給ひつゝ、皆人心を一つになして、楊貴妃の例引き出でぬべかりけるを、  
 (巻二)

という程であつたが、帝はなおも、「鳥とならば」と夜昼契り仰せら」れていたのであつた。

七夕の宵は、牽牛・織女の出会いとともに、玄宗・楊貴妃の密契の宵でもあつた。

七夕の夜の源氏の胸に去来したものは、亡き紫上の面影であつたとともに、『長恨歌』の語る、玄宗・貴妃の睦言であつたに違いない。

こうして見るとき、幻の巻における『長恨歌』の存在は、一層大きいものとなるであろう。

幻の巻は、季節を追つて、紫上哀悼の源氏の一年を綴つた。しかしそもそも、そのこと自体の先蹤も『長恨歌』に求めることが出来るのである。

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪ね来つらむ

幻の巻は、紫上の死の翌年の年頭から筆を起こしている。以後、春夏秋冬、月次の風物を綴りながら、一卷を尽くして光源氏の一年を描くが、すでに『長恨歌』には、楊貴妃没後の玄宗の悲嘆の様が、四季に当てて描かれていた。



春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時 西宮南内多「秋草」 落葉滿「階紅不」掃  
夕殿螢飛思悄然 秋燈挑尽未「能」眠 遲遲鐘漏初長夜 耿耿星河欲「曙」天 鴛鴦瓦冷霜花重

『長恨歌伝』にも、

春之日 冬之夜 池蓮夏開 宮槐秋落

とある。この一節などは、幻卷「かくのみ嘆き明かし給へる曙、眺め暮らし給へる夕暮」に受け継がれていると見ることが出来る。

してみれば、「幻」という巻の名もさることながら、季節に従って源氏の紫上追慕を描くという、幻の巻の構想自体、『長恨歌』に多くを負うものであった、と言うことができよう。桐壺の巻において『長恨歌』を借りて物語を始めた『源氏物語』は、幻の巻においてまた、『長恨歌』を借りることによって光源氏一生の物語を収めたのである。

さらに、このように紫上没後の光源氏の哀悼の日々を語る幻の巻が、『長恨歌』に由来する巻名を持つこと、そしてその叙述の大体が『長恨歌』に基づくことは、光源氏のその後についても、一つの暗示を与えることになるかも知れない。

幻の巻は、

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去り給ふべきほど近く思し設くるに、あはれなること尽きせず、やうくさるべきことも、御心のうちに思し続けて、候ふ人々にも、程々につけてもの賜ひなど、おどろくしく、今なむ限りとしなし給はねど、近う候ふ人々は、御本意遂げ給ふべきけしきと見奉るまゝに、年の暮れゆくも心細う、悲しきこと限りなし。

と、出家の心算りをする光源氏について触れ、紫上追悼の一年の暮れとともに巻を閉じる。

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに年も我が世も今日や尽きぬる

続く巻は、匂兵部卿。次の世代の物語が始まる。

光隠れ給ひにしのおち……

匂兵部卿の巻は、光源氏の死を告げて筆を起こしている。この間に、光源氏は恐らく出家、そして死を迎えたのであろう。古来、その間の事どもに対応する巻として、雲隠れという、名のみあって本文の備わらない巻が当てられている。「雲隠れ」という巻名の暗示するところ、恐らく源氏は幻の巻の後、程なくこの世を去ったことになる。

しかし、それ以前に、幻の巻が『長恨歌』を踏まえた巻であったとするならば、光源氏即世のことが幻の巻に続くであろうことは、すでに予定された展開であったと見るべきかも知れない。

『長恨歌』は、蓬萊での方士と貴妃の魂との会見で擱筆されているが、陳鴻による『長恨歌伝』には、さらにその後日談が付されている。

使者還奏「太上皇」皇心震悼 日不<sub>レ</sub>予 其年夏四月 南宮晏駕

「天子ノ崩御ヲ晏駕ト云ナリ」(『歌行詩諺解』)。方士の報告の後、程なく玄宗の崩じたことが伝えられている。

(幻) 帰りてこの由を奏しければ、帝大きに悲しび給ひて、つひに悲しびに堪へずして幾程もなく失せ給ひにけりとぞ。 (『倭頼髓腦』)

方士帰り参りてこの由を奏せしむるに、御心日を経て悩みまさり給ひつゝ、生まれ給はん程をも、なほ心もとなくや思しけん、その年の夏四月に、みづからはかなくならせ給ひにけり。 (『唐物語』)

方士<sup>イッ</sup>忿<sup>イッ</sup>ギ<sup>イッ</sup>帰<sup>イッ</sup>テ此由ヲ奏ルニ、御門大ニ悲テ、其年四月ニ遂ニ隠レ給ヌ。 (延慶本『平家物語』)

方士<sup>カンザシ</sup>鈿<sup>シ</sup>ノ半<sup>ナカバ</sup>ト言<sup>カクミ</sup>ノ信<sup>カクミ</sup>トヲ受<sup>ケ</sup>テ宮闕ニ帰<sup>カクミ</sup>参<sup>シ</sup>、具<sup>ツフサ</sup>ニ此ヲ奏スルニ、玄宗思<sup>ヒ</sup>ニ堪<sup>タヘ</sup>兼<sup>カネ</sup>テ、伏<sup>シ</sup>沈<sup>マ</sup>セ給<sup>ヒ</sup>ケルガ、其年ノ夏未<sup>ビ</sup>央<sup>ウ</sup>宮ノ前<sup>マエ</sup>殿ニシテ、遂<sup>ツヒ</sup>ニ崩<sup>ツヒ</sup>御ナリニケリ。 (『太平記』)

楊貴妃を失った悲痛のあまり、道士にその魂を尋ねさせたものの、貴妃の死の厳然たることを受け容れざるを得なかった落胆の故であるう、玄宗も程なく世を去ったと言う。

だとするならば、紫上死後の一年、その人の悼んで帰らぬ一年、十分哀傷の日々を過ごした光源氏にとつても、残る命運は自らの死を迎えることであつたのではないか。

紫上の葬送に当つて、すでに源氏は、

世の中申し続けるに、いとゞ厭はしくいみじければ、後るとても幾世をかは経べき、かゝる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げまほしく思ほせど、

(御法)

と、自らの死のそう遠くないことを予感していた。

かく今はの夕べ近き末に、いみじきことのとぢめを見つるに、宿世の程も、自らの心の際も、残りなく見果て、心やすきに、今なむ露のほだしなくなりたるを、

(幻)

一旦は仏の道に入るにしても、死は最早目前のことであつた。御法、「後るとても幾世をかは経べき」とは、『長恨歌伝』の伝える楊貴妃の玄宗への伝言、「太上皇亦不<sub>レ</sub>久<sub>二</sub>人間<sub>一</sub>」に符節を合わせる。源氏の死も、やがて来たるべきことと意識されたであらう。

少くとも、『長恨歌』に則った物語展開の要請するところ、紫上への哀悼を十分に尽くした光源氏にとって、死は最早必然であった。

こうして、『長恨歌』で幕を開けた『源氏物語』は、主人公光源氏の死とともに、その前編の幕を『長恨歌』に扱って降す。光源氏一生の始末、まさに、光源氏の生涯の物語は『長恨歌』に始まり、『長恨歌』に終わるのである。

注

(一) 『大式高遠集』「ある人の、長恨歌、楽府の中に、あはれなることを選び出して、これが心ばへを丹首詠みてをこせたりしに」という歌にも、

太液芙蓉未央柳

はちす生ふる池は鏡と見ゆれども恋ひしき人の影は映らず

七月七日長生殿

かつ見るにあかぬ嘆きはあるものを逢ふ夜まれなる七夕ぞうき

などとあるが、『源氏物語』の発想と揆を一にしている。

また『今鏡』でも、中宮賢子を失った白河天皇の嘆きは、「嘆かせ給ふこと、唐国の李夫人、楊貴妃なむどの類になむ聞え侍りし。(中略) 比叡の麓に、円徳院と聞ゆる御堂の願文に、匡房中納言の「七夕の深き契によりて、驪山の雲に悵望すること勿れ」とこそ書きて侍るなれ。(中略) 朝な夕なの御心地、御垣の柳も、池の蓮も、昔を

恋ふるつまとぞなり侍りける」(すべらぎの中)と描写されている。

(2) この前後の『今鏡』の記述は、他にも「有明の月の影も心を傷しむる色」(「行宮見レ月傷レ心色」)、「紅拂はぬ音の跡」(「宮葉満レ階紅未レ拂」)など、『長恨歌』が踏まえられている。

(3) 『楊太真外伝』では、貴妃が「太上皇亦不レ久レ人間」 幸唯自愛 無レ自苦「耳」と言ったことになっている。

## 其二 長恨歌変奏

『源氏物語』が『長恨歌』を踏まえることは、光源氏没後の世界を描く宇治十帖の場合も例外ではない。

物語において光源氏の衣鉢を継ぐべき遺児薫は、宇治八宮の姫大君に恋するが、大君はついに薫に靡かぬまま世を去ってしまう。傷心の薫は、大君の妹中君から、大君によく似た異母妹の存在を打ち明けられる。大君を忘れかねていた薫は、にわかはこの未知の妹への興味をかき立てられた。

「世を海中にも、魂のありか尋ねむには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めむかたなきよりはと、思ひ寄り侍る人形の願ひばかりには、なかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ。なほ確かに宣はせよ」とうちつけに責め聞え給ふ。  
(宿木)

「魂のありか尋ねむ」とは、『長恨歌』の玄宗が方士に貴妃の魂を求めさせたこと、「世を海中にも」とは、その間の事どもを歌に詠んだ、伊勢の、

しるべする雲の船だになかりせば世を海中に誰か知らまし

(『伊勢集』)

の歌句に拠っている。死んだ大君のことを忘れかねる薫は、その胸中を『長恨歌』の玄宗に託して中君に訴えたのであった。桐壺巻における桐壺更衣の死、幻の巻における紫上の死がそうであったように、宇治十帖においても、大君の死はやはり『長恨歌』の変奏であったと見ることができる。

やがて薫は、噂の妹、浮舟をついに垣間見ることになるが、ここでも再び『長恨歌』の同じ場面が思い起こされていく。

蓬萊まで尋ねて、釵の限りを伝えて見給ひけむ帝は、なほやいぶせかりけむ、これは異人なれど、慰め所ありぬべき様なり、とおぼゆるは、この人に契のおはしけるにやあらむ。  
(宿木)

『長恨歌』の道士は、貴妃の魂を求めて蓬萊にまで至ったけれども、結局、その伝言と「鈿合金釵」を持ち帰るに留まった。しかし、今日の当りにした浮舟の姿は、捜し求めていた亡き大君の面影に生き写し。薫の期待は、『長恨歌』のストーリー展開とは裏腹に、にわかには現実味を帯びて来ることになる。

こうして宇治十帖は、大君の死後、それに変わるべき『源氏物語』最後の女主人公、浮舟の登場を迎えるのである。しかし、見られる如く、大君の死を送り、そして浮舟の登場を迎える薫の心情が、いずれも『長恨歌』に拠って綴られていたことは、『源氏物語』にとって『長恨歌』の存在は、宇治十帖においても依然大きなものであったことを示唆するであろう。宇治十帖の物語は、『長恨歌』を介して、大君の物語から浮舟の物語へと大きく転回して行くことになる。



しかし、浮舟も結局は薫の手に落ちることなく、その元を逃れ去ってしまう。匂宮、薫との間での板挟みの懊惱、宇治川への入水の決意、心ならずも助けられての出家入道。その意志は最早、何人も翻すことも出来ぬほどに堅固なものになっていたのである。

浮舟とともに『源氏物語』は、結末への道をひた走る。浮舟が薫を振り返ることはもう二度とないであろう。けれども『源氏物語』は、その結末を目前にして、もう一度、薫に浮舟への接近を試みさせた。

出家の後、横川僧都の妹尼のもとに身を寄せていた浮舟の居所を突き止めた薫は、その弟、小君を使って浮舟に手紙を託した。浮舟からは梨の礫。小君には取りつく島とて無かった。それでも小君は、仲介の尼君に、せめて一言でもと食い下った。

幼き心地は、そこはかとなく慌てたる心地して、「わざと奉れたるしるしに、何事かは聞えさせむとすらむ。たゞ一言を宣はせよかし」と言へば、  
(夢浮橋)

しかし、もとより浮舟からは応答のあるはずもなく、小君は手を空しくして帰る他はなかった。浮舟は薫のものとから完全に逃れ去ったのである。

いつしかと待ちおはするに、かくたどくしくして帰り来たれば、すさまじく、なか／＼なりと、思すこと様々にて、人の隠し据ゑたるにやあらむと、我が御心の思ひ寄らぬ隈なく、落し置き給へりし慣らひに、と

ぞ本に侍るめる。

(夢浮橋)

小君の報告を聞いて、いぶかしく思う、という薫のスケッチで、『源氏物語』は、その一大巨編の幕を降すのである。

しかし、ここで注目すべきは、その大詰めも大詰め、『源氏物語』がついに幕を降す直前の部分に、恐らく『長恨歌』が取り用いられている点であろう。

「夢の浮橋」の結末が様々の観点から結末と見做し得るにも拘らず、なほあの短かさとの巻名とあの閉ぢめ方とを今一つ積極的に首肯する説明が望ましいとは誰しも思ふことである。就中、余りに主題的表徴的に過ぎる閉ぢめ方は、久しくから私に何かの典拠のうつつしかと推測させもするものであつた。今、私はそれを、白楽天の「長恨歌」の道士招魂の段のうつつと認めようと思ふ。その類似点から始めよう。

まづ始め私にこの仮想を許した直接的根拠は、まことに隱微ながら巻末の小君の浮舟への最後の詞「わざと奉れさせ給へるしるしに何事かは聞えさせむとすらむ、唯ひとことを宣はせよかし」である。これは所謂、道士の請願「請当時一事不<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>他人間<sub>一</sub>者。驗<sub>二</sub>於太上皇<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>然。恐<sub>二</sub>鈿合金釵負<sub>二</sub>新垣平之詐<sub>一</sub>也」(長恨歌伝)の移しではなからうか。

(表規矩子「源氏物語第三部の創造」、『国語国文』第二十七卷四号)

『源氏物語』の最末尾、浮舟を尋ねた小君の科白に、『長恨歌』の影響を見る、表規矩子氏の見解は傾聴に値す

る。薫の意を体して小野の山里に浮舟を尋ねた小君は、『長恨歌』で言えば、「臨叩方士」に他ならなかった。

小君も浮舟に、訪問の「しるし」を求めたが、『長恨歌伝』「験」の字の古訓には「シルシトセン」と訓むものがある（渋江抽斎旧蔵古活字版『長恨歌琵琶行』<sup>1</sup>）。

亡き人のありか尋ねたりけんしるしの釵

（桐壺）

すでに『源氏物語』においても、そうであったように、「しるし」とは、方士の蓬萊訪問の場面にとって、キィ・ワードとも呼ぶべき、重要な言葉であったのである。

しるしの釵とは、方士が「何をしるしにてか尋ね会ひ聞えたることにはすべき」と言ふに、楊貴妃、玉の釵を、「これを持ちて参れ」と言ふ事也。

（『源氏釈』桐壺）

楊貴妃がもとに方士尋ね来たるとき、玉妃玉の釵をこれをしるしに持て参れとてとはせたる（同 宿木）  
幻訪ねずは、いづくの住処ともいかでか聞くことあらん。楊貴妃のしるしの釵を形見として、玄宗皇帝の玉の冠も秋の月に隠れ、

（『高倉院昇霞記』）

玉妃ノ御信ヲ給ハリ候へ。尋ネ奉ル験ニ献ゼン。願ハクハ玉妃君主ニ侍シ時、人ノ曾テ不知ラ事アラバ、其ヲ承テ験トセン。

（『太平記』）

かくて幻の帰らんとする時、玉のかんざしをつみかきて、「これを尋ねきたるしるしに御門に奉れ」と言ふ。

〔和歌題林抄〕

方士が「サラバ罷皈テ玄宗ニ此由ヲ申スベシ。其ノシルシヲ下サレヨ」ト云ヘバ、昔ノ旧物ヲ以テ深情ヲアラハシテ、シルシヲ下サル。

人シレズ貴妃ト君トノ間ノ御契ノ言アラバ承テ其ヲシルシニ備ヘント云。  
 (清原宣賢『長恨歌抄』)  
 (謡曲『楊貴妃』)

『長恨歌』の金釵鈿合なり、密契の語なりは、古く「しるし」と理解されていた。

『源氏積』による『長恨歌伝』の取意、「何をしるしにてか尋ね会ひ聞えたることにはすべき」と、小君の懇願、「わざと奉れたるしるしに、何事かは聞えさせむとすらむ」との見事な照応は、この科白が『長恨歌』の筋立に拠っていたものであることを窺わせる。

もしそうだとするならば、『源氏物語』はその大尾においても『長恨歌』を踏まえるものであったということになる。『源氏物語』の終幕、「夢浮橋」、それもその最末尾に『長恨歌』が踏まえられているとしたら、『源氏物語』にとって『長恨歌』がいかに重要な先行作品であったか、改めて認識されて来よう。

光源氏の一生のみならず、『源氏物語』は、まさに『長恨歌』に始まり、『長恨歌』に終わる物語であった。

そればかりか、その大尾に『長恨歌』が踏まえられていることに着目するならば、冒頭の桐壺の巻、就中、その書き出しの部分に『長恨歌』の影を認める説の存在も、にわかにその意味を増して来る。

まづ、長恨歌は「漢皇重色思傾国」で始まるが、この「漢皇」は、実は唐玄宗なのを、ほんやり霞ませるため漢武帝に仮托したのである。このばあひ、詩中の「漢皇」は、実在した漢武帝ではなくて、当代を醜化した「昔のみかど」であるにすぎない。つまり、固有名詞としての「漢」であるよりも、伝奇的なおもかげとしての「昔の代」なのであり、和文であらわせば、たぶん「いづれの御時にか」となるであらう。

ついでに幾つかの類例を挙げておかう。次の「重色思傾国」は、和文化すれば「女御・更衣、あまたさぶらひたまひける」となりそうであり、第六句の「一朝選在君側」が「すぐれて時めきたまふありけり」に当るかと思はれる。

(小西甚一「いづれの御時にか」、『国語と国文学』第三十二卷第三号)

「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」という『源氏物語』の冒頭文は、「もちろん逐字訳ではないけれども、長恨歌の冒頭の句を見ながら、この文を案じだした、と考へられる」(玉上琢彌「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御―源氏物語の本性(その四)―」、『源氏物語研究』所収)。

しかし、こうしたことは、すでに夙く心ある古人達の留意するところでもあった。

例えばすでに、『岷江入楚』は、「いづれの御時にか」に注して、

紫式部は時代を隠す。(中略)是作者の粉骨也。例へば、風の詩に、漢皇のことを以て、唐を譏るが如し。

と言う。「風」は、「諷」である。<sup>(2)</sup>

同様の指摘は、『長恨歌』注釈の世界においても見出される。

唐の玄宗の事を云とて、何事に「漢皇」と言ふぞなれば、樂天は唐の代の者なる故に、漢を変へて唐を言ふ。伊勢物語に業平を隠して昔男と言ふが如し。源氏物語の始めにも、「いづれの御時にか」と言ふが如し。

(松平文庫本『長恨歌抄』)

桐壺の巻には、恐らくその冒頭文からしてすでに『長恨歌』が踏まえられている。「いづれの御時にか」という、そもそもの物語の時間の設定の仕方そのものが、『長恨歌』に倣うものであったのである。

桐壺の冒頭と夢浮橋の大尾、『長恨歌』を踏まえることにおいて『源氏物語』は、正確な首尾照応を見せる。これに、前章において考察した幻の巻を加えるならば、『源氏物語』は、始中終、物語の要所要所において『長恨歌』の変奏が繰り返されていたということになる。

その中間においても、『長恨歌』は『源氏物語』の随所に取り用いられている。例えば、葵の巻。

「旧き枕故き衾、誰とともにか」とある所、

なき魂ぞいと悲しき寝し床のあくがれ難き心ならひに

また、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひ幾夜寝ぬらむ

正妻、葵上の死を悼む光源氏は、『長恨歌』を我が身に重ねて歌を詠んだ。「鴛鴦瓦冷霜花重 旧枕故衾誰与共」という歌句が、ここでははつきりと引用されている。

あるいは、夕顔の巻。「長生殿の古き例はゆゝしくて」の例はすでに述べたところである。「ゆゝし」の予感に忽ち的中、夕顔は怪死してしまうのであった。

桐壺更衣（桐壺）、夕顔（夕顔）、葵上（葵）、紫上（幻）、大君（宿木）、そして浮舟（夢浮橋）。『源氏物語』作中の多くの女君達は、桐壺帝、光源氏、薫という男主人公達を残してその元を去って行ってしまうが、その悉くを『長恨歌』が彩るのである。

始中終の勘所を押さえるのみならず、『長恨歌』の変奏は、『源氏物語』に首尾一貫、まさにその一部始終に及ぶ。

それは何故なのか。『源氏物語』にとつて『長恨歌』は、なぜかくも重大な存在だったのか。この問題は、『源氏物語』を解くための、恐らく重要な鍵となるのに違いない。

注

(1) 金沢文庫本『白氏文集』傍訓、「ケンセム」。

(2) 『山下水』には、「式部ハ蔵<sup>カク</sup>ニ時代<sup>ヲ</sup>一。(中略) 仮令諷ノ詩<sup>ニ</sup>以漢如<sup>レ</sup>詭<sup>レ</sup>唐<sup>一</sup>とある。

付記 本稿成るに当つて、平成二十五年成城大学特別研究助成を受けた。